

A Week On The Concord And Merrimack Rivers

における Thoreau の旅*

— 始源への旅 —

六 川 信**

Henry David Thoreau (1817-1862) の旅については、1978年度日本 Thoreau 協会会報 (12月号)で私見を述べた。ソーロウの場合、空間的地理的な旅より精神の内面への旅が重要な意味をもつ。本稿の意図は、ソーロウの舟旅の回想の物語 *A Week on the Concord and Merrimack Rivers* (1849) (以下『一週間』と書く) の旅の意味を検討し、ソーロウの旅の特質を考察することにある。

『一週間』の構成は、出版以来、批評論争の焦点だった。批評家の意見を概観するなら、明確に相反する二つの見解がある。一つは、『一週間』は主として哲学的面の加筆のある旅行紀行文であり、加筆が脱線となり作品としての統一性 (Unity) が全く失われているという批評である。これに反して、他は、『一週間』は見かけは「旅のレポート」の体裁をとってはいるが、一つの主題が進行している物語であり、一見脱線と見られる箇所も有機的によく統一されていて、非常に緻密に構成され丹念に書かれた構造と主題に一貫性のある作品である、とする見解である。

前者の見解は、James Russell Lowell に始まり、Robert Louis Stevenson, Henry S. Salt, Brooks Atkinson, Henry S. Canby, Carl Bode, Joseph Wood Krutch 等によるものであり、Walter Harding の意見も、折衷的ではあるがこの見解に属す、と考えていいであろう。Lowell はソーロウの脱線が不適切だと決めつけ、「Friendship や読書論に熱中してソーロウは船首のオールから離れ、蟹でもつかまえに行ってしまったと思われる」⁽¹⁾と皮肉まじりに述べている。Stevenson は脱線の friendship は Thoreau の冷たい人柄を表わすものと酷評し、この作品が不評となる根源をつくった。Atkinson は『一週間』を支離滅裂な formless な作品と断じた。Canby も “Friendship” と “The Christian Fable” は不適切だとし、formlessness を強調した。しかし、Lowell と同時代に、ハーバード大学の学生 Edwin Morton が「『一週間』を彼は非常に成功させた。この光に輝らして見ると、この書は芸術的で美しいでき栄えて *Walden* 以上だと思う」⁽²⁾と述べたことは注目されなければならない。

さて、再評価の見解は、Sherman Paul, Alan Beecher Hovey, William B. Stein, Lawrence Buell, Frederick Garber, Gail Baker, Jonathan Bishop, James McIntosh, Robert F. Sayer, Link C. Johnson 等の研究者によるものである。この見解の第一歩は

* 日本英文学会中部地方支部大会において発表

** 一般科 英語 教授

原稿受付 昭和58年9月24日

F. O. Matthiessen によって踏み出された。『一週間』の organic process に初めて光をあてたのは彼であった。Sherman Paul はその考えを更に広めた。Sherman Paul は『一週間』の旅が精神探求の旅に類似していることを指摘した最初の此評家である。彼はこの作品に一つのテーマが連続的に続いていることを解明し、『一週間』を“deliberately organic in form”と評した⁽³⁾。

Link C. Johnson は、ソーロウのマニュスクリプトを克明に調査研究し、『一週間』がいかに計算されて創作された統一のある作品であるかを検証した⁽⁴⁾。Lawrence Buell の批評は Sherman Paul に続くものであり、各章を詳細に分析しこの作品の統一性を実証している⁽⁵⁾。Robert F. Sayer は更に進めて、「『一週間』はアメリカにおけるインディアンと西欧との関係を詩形式をとって、圧縮された一つの歴史として創造している」⁽⁶⁾と述べている。筆者はテーマ統一説をとる。

要するに、再評価がなされたのは、この作品を紀行文としてではなく追憶と回想の作品としてとらえ、一週間を枠組としたこの作品をシンボリックな読み方をしたからである⁽⁷⁾。

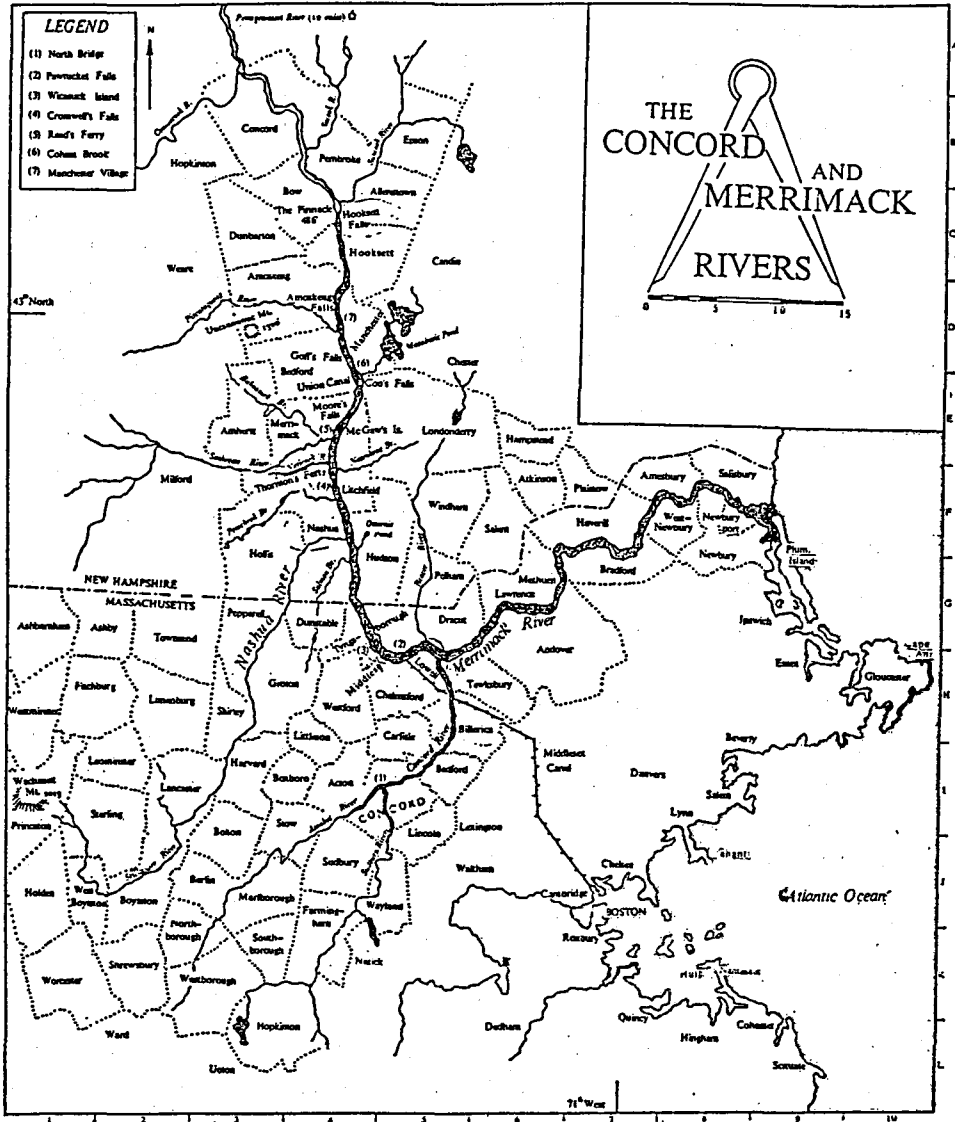
1

『一週間』は、Henry David Thoreau が1839年兄 John と共に遊んだコンコード川とメリマック川の二週間の舟旅に基づいている。これは、破傷風で急逝した兄への Elegy (哀歌)として書かれた。この作品に兄 John の名が明示されていないのはこれ故である。兄に捧げられた記念碑なのだ。「水曜日」の章の三分の二を占める友情論は高い愛の讃歌であって、人間性の根源にせまるものであり、ソーロウが兄を脳裡においていたことは明らかである。

ソーロウは兄 John と二人でコンコード川の舟着場を下った。1839年8月31日土曜日で、ソーロウは22歳であった。二人は共同で私塾を経営していたので、教育の仕事の合間を利用しての舟旅であった。舟はその年の春二人で造った15フィートの長さの平底舟であった。

コンコード川を下った二人はその川の Billerica に野営し、翌朝運河を通して Middlesex でメリマック川に入る。そこから、ニュー・ハンプシャー州へ続くこの川をさか上り、Tyngsborough, Nashua, Bedford, Hooksett で野営を続けて川を上る。川旅はここで終る。5日はニュー・ハンプシャー州の Concord まで10マイルの徒歩旅行をしてそこに野営。6日は Plymouth まで40マイル馬車に乗り、その後 Thornton まで徒歩でいきその宿に泊る。その後4日間はハイキングと登山ですごしたが、その間、Thornton, Franconia, Crawford Notch, Mt. Washington, Conway, Concord in New Hampshire で野営する。10日は念願の Mt. Washington に登頂し、馬車で Conway に戻る。11日再び馬車で Concord に戻り、12日朝 Hooksett のポートを置いた場所に馬車で戻り帰路に着く。川の中の大きな砂州で野営し、約50マイル舟で下り、13日夜故郷 Concord に帰った。二週間の旅であった。

この旅行記の執筆をソーロウは頭初予定していなかった。この二週間の舟旅の日記の記録が1ページ半にすぎないことはその証しであろう。1842年1月11日兄が破傷風で急死すると、ソーロウは作品創作の決意を固める。彼は作品創作のために、1845年7月4日ウォルデン湖畔での独居生活に入った。1842年から44年に亘る日記から素材を集め、その年のうちには初稿を脱稿した。1846年には改稿が完成する。1846年秋の Maine への旅の体験が170ページ加筆され、1847年に二稿が完成する。1848年には、友情論が入り更に投獄の体験も「日曜日」



Reconstruction of Thoreau's map of the route covered in *A Week*. Robert F. Stowell, *A Thoreau Gazetteer* (Princeton: Princeton University Press, 1970), page 4.

の章に織りこまれた。1849年2月には完成し、同年5月30日 James Monroe 社から1000部印刷出版された。

2

『一週間』は見かけ上は紀行文であるが、この旅行記は45回に亘って中断される。宗教、哲学、東洋文学、友情論等の挿入のためである。420ページのこの作品のうち文字通りの旅行記は約131ページにすぎない⁽⁶⁾。『一週間』は単なる空間的地理的旅の記録ではないのだ。

ソーロウの構想はインド聖典の影響により、八章の構成にあった。従って、実際の二週間の舟旅を一週間にまとめ、これを作品の枠組とした。この創作態度は、二年二カ月のウォルデン湖畔での独居生活を一年の季節のサイクルをストラクチャーとする *Walden* へと続く。ソーロウは“An Excursion on the Concord and Merrimack Rivers”という頭初のタイトルを *A Week on the Concord and Merrimack Rivers* に変えるが、形式を整え旅のモチーフを強調するためであった⁹⁾。

『一週間』では、ソーロウがマサチューセッツ州 Concord を出発し、彼が New Concord と呼ぶニュー・ハンプシャー州 Concord に至り、Mt. Washington 登頂を果たし、再び故郷の Concord に戻って旅が完結する。ある地点に行っても必ず Concord に戻るという円環の旅はソーロウの旅の特長の一つである。この意味で、『一週間』の出発点、即ち、Concord の舟着場は重要な意味をもつ。ソーロウは、“...for Concord, too, lies under the sun, a port of entry and departure for the bodies as well as the souls of men”¹⁰⁾ “This would have been the proper place to conclude our voyage, uniting Concord with Concord by these meandering rivers,....” (*A Week*, 322) と述べる。舟着場は、精神と肉体の出発と帰着の場所である。ソーロウにとって旅に出るとは、すなわち、故郷に帰ることなのであった。『一週間』は出発と帰還の物語なのである¹¹⁾。Concord (調和の意)という地名が旅を一直線に結んでもいる。州を越えた物語の中心的なこのサイクルは、一週間という時間の進行のサイクルとも重なる。時間と川の前方向への流れとそれに拮抗したソーロウの過去の歴史への関心の動きがリズムカルに進行する。

『一週間』の中心的テーマは何であろうか。Sherman Paul は霊的生活の問題、人間存在の探求そして有機的生活を掲げる。William B. Stein は、土曜日から金曜日にいたる時間のサイクルを、ヨガにおける瞑想の深まりゆく過程、即ち、懐疑から解脱までが記されている、と説明する¹²⁾。事実、『一週間』における舟旅は、自己の探求のためのメタファー(隠喩)に転換されているのである。この作品は、地理的視点からよりも、内面的な視座にすえて読まれなければならない。作品のテーマが人間の霊的存在の探求にあるからである。

3

舟旅の目的は、ニュー・ハンプシャー州北部のアパラチア山脈の一支脈 ホワイト山脈 (The White Mountains) の最高峰 Mt. Washington (標高1,919m) 登頂を果たし、メリマック川の水源地を探しあてることであった。それは、本源の一点即ち本質的源泉の探求にあった。『一週間』の根源へ登りつめる旅は *Walden* では根源を掘り下げる旅となっている。この両者において旅は巡礼の旅でもある。“A stream ran down the middle of the valley, on which, near the head, there was a mill. It seemed a road for the pilgrim to enter upon who would climb to the gates of heaven.” (*A Week*, 190) “We now no longer sailed or floated on the river, but trod the unyielding land like pilgrims.” (*A Week*, 324) “True and sincere traveling is no pastime, but it is as serious as the grave.” (*A Week*, 326) (下線部筆者) 谷の中程を流れる川は天に登りゆかんとする巡礼者の道路であり、メリマック川の遠源を訪れ行くソーロウの旅は巡礼の旅にふさわしい。ソーロウにとって旅は気晴らしではなく職業なのであり、死をかけた真剣なものであった。Concord の町の

人々に別れを告げ、奥深い山の野生のみなぎるメリマック川の水源を訪ね行くことは、ソーロウにとって神聖な行為であり聖地への旅であった。何故そうなのか、ソーロウのフロンティア論を聞こう。

The frontiers are not east or west, north or south; but wherever a man *fronts* a fact, though that fact be his neighbor, there is an unsettled wilderness between him and Canada, between him and the setting sun, or, farther still, between him and *it*. Let him build himself a log house with the bark on where he is, *fronting* IT. (*A Week*, 323-324)

ソーロウはフロンティアに新しい意味解釈を加えた。“unsettled wilderneckness”の“unsettled”は人跡未踏な奥地を連想させ、“wilderneckness”は西部の別名だ。ソーロウの荒野論からすれば、そこは無垢で神聖なアルカディアなのである⁹⁹。その自然に駆け込んだ loghouse (lumber ではない) を建てるとは、俗世に訣別し内面深く自己の城を築くことなのだ。Edwin Fussell はこの“IT”を「言い表わせないもの」と解釈しているが¹⁰⁰、現実の「その物」と考えるべきだろう。彼のフロンティアは、現実 (reality) と直面する——ソーロウは confront の代りに好んで front とかく——ところであり、彼自身の精神の中に存在した。彼のフロンティアは、予言的であり、宗教的であり、存在の源泉であり、再生のエネルギーであった。

始源にせまろうとするソーロウの精神は、一方で、「その物」としての生まの自然に密着し、徹底的に自然を観察研究しようとする博物学者的態度となり、他方で、神聖な自然に心身共に融合し観念の世界に深く没入しようとする憧憬となって表われる。この後者こそが、ソーロウが超越主義者と呼ばれる所以である。『一週間』をこのように考察するとき、この作品は二つのレベルの旅の物語であると言いうる。一つは、狭く限定されたニュー・イングランドの自然への旅であり、他方は、一切の限界を超えた自己の精神の内面世界への旅である¹⁰¹。

James McIntosh も論じているが、『一週間』の扉にある二番目の詩は、上記の意味でのこの作品の特質を集約的に暗示している。

I am bound, I am bound, for a distant shore.
By a lonely isle, by a far Azore,
There it is, there it is, the treasure I seek,
On the barren sands of a desolate creek (*A Week*, 2)

我は行く、我は行く、遠いかなたの岸辺へ
孤独なる島、はるかなるアゾレス島
そこにある、そこにある、我が求める宝が
わびしき小川の不毛の砂地の上に。

この詩には、ソーロウの二つの旅が含まれていると考えられる。一つは、メリマック川

上流のペニジェワセット川 (The Penigewasset) の荒涼たる自然を人生の意味を求めて独り歩むソーロウの姿であり¹⁰⁾、他は、その川を下りつつ思う遠いアゾレス諸島であり無限の概念と連合した超絶せる内面的深奥の世界である。Jonathan Bishop は “distance”, “depth”, “wildness”, “solitude”, “leisure” は sacred を, “nearness”, “surface”, “society”, “cultivation”, “labor” は profane を暗示すると述べている¹¹⁾。これに従えば、この詩の “distant”, “lonely”, “far” は sacred を暗示する。すると、ポルトガル西方の大西洋に浮かぶアゾレス島は、現実の島というより神聖な場所となり、ソーロウが希求する観念の深遠な世界をさすことになる。また、“treasure” はソーロウがあくまで求める精神の極点を示すといえよう。第四行もアゾレス島の砂浜ではなく、ペニジェワセット川の水源に近い川中の狭い荒涼とした小さな流れを回想しながら歌い上げている、と言いうる。“desolate” と “barren” は wildernessに通じ、それは sacred を暗示している。“desolate creek” は、メリマック川の上流の小川であると同時に、ソーロウの人生そのものとも重なっている。この詩では、現実としての自然そのものと、そこから飛躍した観念の世界の光が提示されており、それを同時に知ろうと努めるソーロウの姿が見てとれる。この態度は、『一週間』に一貫して流れている。川岸の風景や川の植物と魚などが克明に描写されて、川旅に密着した叙景描写がアメリカ文学の伝統的な風景文学となっている。と同時に、自己の想像力という無限の世界の中で、日常の生活からのがれ、心の中に自由に住み、自然に没入しようとする神秘家としての姿さえも見えるのである。この四行詩にただよう冒険的な緊張感は、『一週間』全体に通じる特質となっている¹²⁾。

4

『一週間』に描かれる自然は優しくのどかである。しかも、そこには自然の女神の存在がある。川岸に高く繁茂する樹木の影をくっきりと映し出し、鏡のような水面をたたえるコンコード川の岸辺から舟旅に出発したときの状景を「土曜日」の章の冒頭にソーロウは書く。

A warm, drizzling rain had obscured the morning, and threatened to delay our voyage, but at length the leaves and grass were dried, and it came out a mild afternoon, as serene and fresh as if Nature were maturing some greater scheme of her own. After this long dripping and oozing from every pore, she began to respire again more healthily than ever. So with a vigorous shove we launched our boat from the bank, while the flags and bulrushes courtesied a God-speed, and dropped silently down the stream. (*A Week*, 12)

自然の女神は、夏の霧雨の後、総ての気孔からしたたり、にじみ出て、かつてなく健全に呼吸している。雨にけむる川岸の景色の中にソーロウが五官で感じた人格化された自然の姿がある。ジョンとヘンリーの舟旅もこの女神の企ての一部なのかも知れない。自然に神が放射されていると直覚し、自然を「母なる自然」「教師たる自然」とソーロウは考えている。彼は、それを、大文字の Nature によって示す。Nature が “respire” し、“flags” や “bulrushes” が旅の安全を祈ってくれる中を舟出するとソーロウが述べる時、誇張ではな

く自然に親しんだソーロウの真実なことばと受け取りたい。これは、舟出の場所を幾度も訪れたことのある筆者の判断である。彼は宇宙を organic なものと捉え、自然の各々の事物や事象を宇宙の中心的な生命の表われと考えていたのである。ソーロウが、“blow”より“breathe”という語を好むのもそのためである。“For the most part, there was no recognition of human life in the night; no human breathing was heard, only the breathing of the wind.” (A Week, 39) “the wind breathed harder than usual....” (A Week, 354) “the breath of October wind....” (A Week, 358) (下線部筆者)

ソーロウには、生物か無生物かを問わず、大宇宙のあらゆるものに深い親近感をもってまわって行く態度が見られる。生来の自然愛に加えて、母なる自然を無垢で神聖な場所と考えたソーロウが始源探求の旅にのぼったとき、自然に没入しゆくのは当然の結果であったと言える。ソーロウの自然への舟旅と文明からの離脱を次に検討しよう。

川旅の第一日目、コンコード川を Bellerica まで7マイル程下る。草地在夜露にしめり、かすかな紫雲が水面に映えはじめると、砂州に舟を停泊させ、数ロッド入った丘の上を野営地とする。

It seemed insensibly to grow lighter as the night shut in, and a distant and solitary farmhouse was revealed, which before lurked in the shadows of the noon. There was no other house in sight, nor any cultivated field. To the right and left, as far as the horizon, were stagging pine woods with their plumes against the sky, and across the river were rugged hills,...with here and there a gray rock jutting out from the maze. The sides of these cliffs, though a quarter of a mile distant, were almost heard to rustle while we looked at them, it was such a leafy wilderness; a place for fauns and satyrs,... When we had pitched our tent on the hillside, a few rods from the shore, we sat looking through its triangular door in the twilight at our lonely mast on the shore just seen above the alders, and hardly yet come to a standstill from the swaying of the stream; the first encroachment of commerce on this land. There was our port, our Ostia. (A Week, 38-39)⁹⁹

前述した Jonathan Bishop の sacred を示す語、“distant”, “solitary”, “uncultivated”, “wilderness” はすべてこの一節に見出される。“a distant and solitary farmhouse” と “nor any cultivated field” という言葉は文明との離脱と聖地への参入とを暗示する。ソーロウが野営のために舟を停泊させテントを張るという行為は、文明からの脱却の完了を印象づける。“a leafy wilderness” という言葉によって、聖なる土地であることが一層強調される。川の崖の中腹は、西欧的想像力の生み出した satyr——〔ギリシャ神話〕サテュロス、半人半獣の森の神——や、faun——〔ローマ神話〕半人半羊の林野の神——の住むところでもある。舟の停泊場所は、Henry と兄 John の港であり、Ostia——イタリア中部 Rome 南西方の町で古代ローマの外港——なのである。Ostia は Arcadia を連想させる。簡潔で無垢で純朴な風景に満ちた牧歌的理想郷 Arcadia は、聖地なのである。ソーロウは、原始的で時間を超えた神聖なる黄金時代の自然の世界へ舟出した、と主張しているかのようなようである。ソー

ロウは、"Gradually the village murmur subsided, and we seemed to be embarked on the placid current of our dreams, floating from past to future as silently as one awakes to fresh morning or evening thoughts." (*A Week*, 17) とも書く。過去から未来へと舟を浮かべ、ソーロウは時間の始源に戻ったかのようなのである。従って、川の流に揺れ動く停泊中の乗り捨ててきた舟を見るとき、その舟は聖なるこの土地に初めて侵入して来た商業と映り、その一本のマストは文明生活の最後の上品さを表わしているように感じられるのであった。

5

ソーロウの旅は、内面の深さに反比例するかの如くに、観念の世界に飛翔して了うことはない。具体的自然にあくまで密着している。彼の旅は、当時のアメリカ人と同じく、野牛の皮を敷き物にも毛布にも用いて野営し、鳥の毛をむしり燻り、魚を焼いて食べ、携帯食料の不足を補った。リスの皮をむき内臓をとり除いて食卓に供したこともある。コンコード川の魚 *bream* (コイ科の淡水魚) との戯れをソーロウは書く。"I have thus stood over them half an hour at a time, and stroked them familiarly without frightening them, suffering them to nibble my fingers harmlessly, and seen them erect their dorsal fins in anger when my hand approached their ova, and have even taken them gently out of the water with my hand." (*A Week*, 25) 親しげになでてやったり、無邪気に指に食いつかせる行為から、魚を友とあるソーロウ像が彷彿とする。そのソーロウの姿には、小林一茶や良寛の姿勢も感じられる。だが、その魚を食卓にのせるヤンキー・ソーロウの実像を忘れてはならない。

野人ソーロウは、野生 (*wildness*) を愛した。原始的生命の横溢する無垢な野生の姿にひかれたからである。Walden では "We need the tonic of wildness." と述べ、エッセイ "Walking" では "In literature it is only the wild that attracts us." と主張し、更に、"In Wildness is the preservation of the World." と断言している。これは、まさに、野生の中に福音を聞きとったソーロウの力強い言葉なのである。ソーロウが野生の近くに住み、いかに野生に包まれて舟旅をしたのかは、以下の文によく表われているように思われる。

My only companions were the mice, which came to pick up the crumbs that had been left in those scraps of paper;... They nibbled what was for them; I nibbled what was for me. (*A Week*, 196-197) With sharp stones and my hands, in the twilight, I made a well about two feet deep, which was soon filled with pure cold water, and the birds too came and drank at it. (*A Week*, 194) I can fancy that it would be a luxury to stand up to one's chin in some retired swamp a whole summer day, scenting the wild honeysuckle and bilberry blows, and lulled by the minstrelsy of gnats and mosquitoes! (*A Week*, 319) The wildness is near as well as dear to every man. Even the oldest villages are indebted to the border of wild wood which surrounds them... The very uprightness of the pines and maples asserts the ancient rectitude and vigor of nature. Our lives need the relief of such a background, where the pine flourishes and the jay still screams. (*A Week*, 179)

自然を同胞として愛好し憧憬するソーロウの心情は、彼が舟旅に使用した舟への気配りの中にも表われている。一週間を要した兄 John との手造りのこの平底舟は、きつすい線は青色に、その下の部分は緑に塗り分けられていた。空の色に似せて青く、水の色に似せて緑にしたものであった。

自然に密着し、野生の生命力を求めて旅するソーロウが自己の内面を内省するとき、人間の獣性と神性の奇怪な二重性を認識する。人間の精神における野生な本能と高さへ向かう本能、野蛮性と純粋性、言うなれば、自己の意識の二重性の認識を、ソーロウは、“We are double-edged blades, and every time we whet our virtue the return stroke straps our vice. Where is the skillful swordsman who can give clean wounds, and not rip up his work with the other edge?” (*A Week*, 236) と述べている。人間の業を認識していたソーロウは、この二重性をどう完結させるであろうか⁴⁾。

6

『一週間』は、若き日のソーロウの読書と思索についての総てが投入され、全体が文学的象徴的な旅の枠組で構成されている傑作である。そこに展開される博物学のエッセイ、宗教論、友情論、文学批評等どれも興味に溢れている。中でも、岸辺を出て岸辺に戻る川旅における行動と瞑想を考察することは、超絶主義者ソーロウの実像を知ることになる。

ソーロウの最も重要なことばは、“If Nature is our mother, then God is our father.” (*A Week*, 398-399) であろう。自然は神の現われなのである。神が絶対であるから、道徳、倫理の鏡も自然の中に見出すことができる。自然には、最も洗練された人生の題材があり、自然が完全な芸術であり、神の造り賜うた芸術なのである。“Nature is a greater and more perfect art, the art of God.” (*A Week*, 339) 従って、自然を旅する者は、生まれ変わり、自然からパスポートの発行を受けなければならないのだ。“The traveler must be born again on the road, and earn a passport from the elements, the principal powers that be for him.” (*A Week*, 326) 自然を探索することは、自己の探求、即ち、内部世界に沈潜し深く自己の心を耕すことに通じる。

内部世界の旅において、ソーロウは、瞑想のうちに純粋に感覚的生活に徹することにより、神を見る「見者」(seer) を志す。これは、当時の宗教界から見れば、不敬なことであった。彼は述べる。“We need pray for no higher heaven than the pure senses can furnish, a purely sensuous life... The ears were made... to hear celestial sounds... The eyes were made... to behold beauty now invisible. May we not see God?” (*A Week*, 408) この「見者」は、ソーロウがウォルデンの森で宇宙の真理を直観する方途として到達したものであり、彼はこの「見者」を心眼として生きた。自然の中で神を見ようとする「見者」は、ソーロウの美意識の源泉であり、倫理的・道徳的基礎であり、真理を見る彼の足場であった⁴⁾。瞑想と沈黙の中で、この「見者」に映りゆくことはすべて Eternal なものとして、彼の心に観喜をさそった。心理学的見地からすれば、母性への憧れの故か、ソーロウは自然の女神の小球体が自分の血管の中に忍び入るのを感じるのだ。“Sometimes a mortal feels in himself Nature,—not his Father but his Mother stirs within him, and he becomes immortal with her immortality. From time to time she claims kindredship with us, and some

globule from her veins steals up into our own.” (*A week*, 404)

始源への旅に出発したソーロウが、果たして、霊的意味において、目指す始源にたどりついたのであろうか。宗教的な雰囲気のためよう最も有名な一節を引用し、その問題を検討することにする。

Then idle Time ran gadding by
And left me with Eternity alone;
I hear beyond the range of sound,
I see beyond the verge of sight, —

I see, smell, taste, hear, feel, that everlasting Something to which we are allied, at once our maker, our abode, our destiny, our very Selves; the one historic truth, the most remarkable fact which can become the distinct and uninvited subject of our thought, the actual glory of the universe. (*A Week*, 181-182)

この四行詩の初めの二行「無為の「時」はあてもなく流れ、ただ「永劫」と共にありき」には、死のイメージが漂う。それは、Eternity という語によるが、この語は啓示の超時間的瞬間をも指す。次の二行は、ソーロウは時間から超脱していることを暗示する。“that everlasting Something” は、ソーロウの言う universal One や the Supreme Being や the perennial source of our life と同じものを指す。これを感覚的に受けとめているソーロウは、永遠と共にあり、至福の境地にある。ソーロウは今、高められた感覚的体験そのものの中にある。神性を有している人間が、その神性を発現せしむるためには、「感覚」をとぎすます方向に自己をしむけていけばよいのだ、と他の箇所でもソーロウは説いている。

この魂の深まりゆく様子は、川の流れにのせて語られ、霊的生活というテーマは、『一週間』の旅そのものと深くかまわっている。ゆったりとしたなだらかな息の長い文体は、のどかなニュー・イングランドの牧歌的自然の風景と調和している。始源を目指す旅という視点でこの作品を見ると、希望と明かるさに満ちた深まりゆくソーロウの魂の旅の記録、と読むことができる。この意味で、『一週間』は際立っていて、アメリカ超絶主義文学の代表的作品である。

〔注〕

- (1) James Russell Lowell, “A Week on the Concord and Merrimack Rivers,” *Massachusetts Quarterly Review*, III (December, 1849) pp.40-51. Reprinted in *The Thoreau Society Bulletin*, No. 35, pp.1-3.
- (2) Edwin Morton, “Thoreau and His Books,” *Harvard Magazine* (January, 1855). Reprinted in *Pertaining To Thoreau*, ed. John Weiss (1901; rpt. Folcroft: The Folcroft Press, 1969), p.58.
- (3) Sherman Paul, *The Shores of America: Thoreau's Inward Exploration* (New York: Russell & Russell, 1958), p.210.
- (4) Link C. Johnson, “Historical Introduction,” *A Week on the Concord and Merrimack*

- Rivers, ed. Carl F. Hovde (New Jersey: Princeton University Press, 1980).
- (5) Lawrence Buell, *Literary Transcendentalism: Style and Vision in the American Renaissance* (Ithaca: Cornell University Press, 1973).
 - (6) Robert F. Sayer, *Thoreau and the American Indians* (New Jersey: Princeton University Press, 1977).
 - (7) *The Shores of America* (1958). *Literary Transcendentalism* (1973). James McIntosh, *Thoreau As Romantic Naturalist: His Shifting Stance Toward Nature* (Ithaca: Cornell University Press, 1974). Frederick Garber, *Thoreau's Redemptive Imagination* (New York: New York University Press, 1977). はみな『一週間』の象徴の意味をさぐる批評書である。本論はこれらの書に負っている。
 - (8) John Aldrich Christie, *Thoreau As World Traveler* (New York: Columbia University Press, 1966), p.251.
 - (9) "Historical Introduction."
 - (10) Henry David Thoreau, *A Week on the Concord and Merrimack Rivers, The Writings of Henry David Thoreau* (1906; rpt. New York: AMS press, 1968). 以下同書からの引用は *A Week* と頁数で示す。
 - (11) *Thoreau's Redemptive Imagination*, p.193.
 - (12) Willam B. Stein, "Thoreau's First Book: A Spoor of Yoga," *Emerson Society Quarterly* (1965), No.41, pp.3-25.
 - (13) 拙稿「Thoreau の荒野と野生——西方志向の特質——」『長野工業高等専門学校紀要』第10号, pp.81-95.
 - (14) Edwin Fussell, *Frontier: American Literature and the American West* (Princeton: Princeton University Press, 1965), p.178.
 - (15) *Thoreau As Romantic Naturalist*, p.139.
 - (16) Arthur L. Ford, "A Critical Study of the Poetry of Henry Thoreau" unpubl. diss. (Ann Arbor, 1964), p.59.
 - (17) Jonathan Bishop, "The Experience of the Sacred in Thoreau's *Week*," *ELH*, 33 (1966), pp.72-73.
 - (18) *Frontier: American Literature and American West*, p.141.
 - (19) *Literary Transcendentalism*, pp. 212-213. 及び *Thoreau As Romantic Naturalist*, pp.142-143. にこの引用箇所の論評があり本論はそれに負うところが大きい。
 - (20) 拙稿「H. D. Thoreau の自然観——その二重性について——」『長野工業高等専門学校紀要』第6号, pp.111-126.
 - (21) 安藤正英『ニュー・イングランド文学精神の諸相』（朝日出版, 1977）, pp.37-50. 拙稿「神秘家 Henry David Thoreau の挫折」『長野工業高等専門学校紀要』第10号, pp.75-86.

（本論は、昭和56年10月3日、愛知県立大学において開かれた日本英文学会中部地方支部（The Chubu Branch of the English Literary Society of Japan）第34回大会で発表した拙稿 *A Week* におけるソーロウの旅」に加筆したものである。）